

崩れないおだんごが作りたい～素材のおもしろさや不思議さに気付いて～

重原幼稚園（愛知県刈谷市）

[4歳児]

水、砂、土、泡など、可塑性のある身近な素材に触れて遊ぶ機会を設けたり、生かしたりして「偶然的出来事」や「偶然的出会い」から、驚きや不思議さを感じ取り、試したり、工夫したりして遊べるようにしていく。

< 幼児の姿と教師の願い >

子どもたちは、砂場で砂や水、皿やなべなどを使い、カレー、ジュース、だんごなどいろいろなものに見立て、ごちそう作りを楽しむ姿があった。その中でだんごを作ろうとするR児は、何回丸めてもすぐにだんごが壊れてしまうので、壊れないようにしたいという思いがでてきた。教師は、砂、水、土など身近な素材に触れながら、素材の持つ感触や特性、不思議さを感じ取り、自分なりに試したり、工夫したりして欲しいと願った。

「私たちの丸いおだんごできたよ」

6月12日

「先生にごちそうを作ってあげる」と言い、A児とR児は砂でだんご作りを始めた。喜んで作り始めるが、R児のだんごは丸くならず壊れてしまう。そこで、A児は「先生、丸いおだんごにしたいのに、手にくっついて丸くならないよ」と言い、R児は「先生、私のすぐ落ちてきちゃう」と言い、保育者に助けを求める。

教師「Aちゃんはベタベタ手にくっついて丸くなくて、Rちゃんのは手につかないけど、すぐにパラパラに崩れてきちゃうだね。どうしようね。困ったね」と一緒に考える。

R児「そうなの。私はすぐ崩れてきちゃうし、Aちゃんのはベタベタで手にくっついちゃうの」

教師「同じ砂なのに、ベタベタとパラパラで全然違うね。先生も作ってみようかな。砂はこの辺のがいいかな？ギューギューってやってみよう」と言いながら作ってみる。

R児「分かった。Aちゃん、私のと合体してみよう。そうしたら丸い泥だんごができるかもしれないよ」

A児「いいよ。やってみよう」と二人の持っているだんごを混ぜてR児が丸めてみた。R児がやる姿をA児も興味深く見る。R児「私たちの丸いおだんごできたよ」、A児「できた」R児と顔を見合わせて喜ぶ。

教師「本当だ。丸いおだんごになったね」

R児「そうだよ。水がちょっとでもだめだし、いっぱいでもだめなんだよ。おもしろいね」

教師「いいことに気が付いたね。Rちゃんの水が少な過ぎで、Aちゃんのは多過ぎだったんだ。

だから合体したら丁度よくなったんだね。ちょっと水の量が違っただけなのに砂や水って不思議だね」

A児「うん。ちょっと違うだけなのにね。もう一個作ってみよう」と少しずつ水を足しながら、だんごをもう一つ作り始める。



< 考察 >

A児もR児も、丸い崩れないだんごを作りたいという思いはあるが、なかなかうまくいかない。そこで教師は、のように、幼児が困っている姿を受け止めていき、どこでつまづき困っているかを、改めて状況を分かりやすく言葉に出していくことで、のように幼児なりに思いを巡らせ、自分で考えようとする姿につながったのではないかと思った。

幼児がつまづいている時、のようにパラパラや、ベタベタなど幼児に分かりやすい言葉で教師が表現したことで、素材の違いが分かり新たなひらめきがあり、「じゃあ合体してみよう」という幼児なりの発想につながったのではないかと思った。また、のように実際に教師も同じようにやって見せることで、幼児なりに思いを巡らせて、新たな考えを見付け出すことができたのだと思った。

自分たちで考えたことを実際に試したことで、砂と水の量の関係の不思議さやおもしろさに気づき、のように自分なりのこうするといふんだという発見があり、納得して満足感を味わったり、もう一度試してみたい、もっとやってみたいという更なる意欲を持ちたりすることが分かった。

「魔法の粉だね！」

6月13日

A児とR児は昨日作っただんごを見る。少し硬くなっていることやひびが入っていることに気づき保育者に伝える。持ち歩いて話しているとだんごは崩れてしまう。そこで、崩れないだんごを作りたいと思い、相談する。しかし、いい考えは浮かばない。そこで保育者は、「そうだよね。せっかく作ったおだんごが崩れたら悲しいよね。でもね、先生いいもの見付けたんだ」と言い、絵本「どろだんご」（著：たなかよしゆき、のさかゆうさく 出版：福音館書店）を見せる。（絵本には、だんごを固くする方法や光る泥だんごの作り方、作っただんごで遊ぶ方法などが載っている）二人は絵本を興味深く見て、「固いだんごを作るにはサラサラの砂をかけるといふんだって」「やってみよう」と言い、砂場へ向かい泥だんごを作る。A児が「これにサラサラの砂かけるんだよね」と言い、めあての砂を探す。

R児「そうそう。サラサラの砂ってどんなのかな？」

A児「これは？」と砂場の隅の乾いた砂を指さす。

R児「やってみよう」と何度もかけるが、固くならない。そして「これサラサラの砂じゃないよ」と言う。

A児「じゃあこの砂がいいのかなあ？」と幼稚園中を歩いて探す。

R児「そうだ。お山の上の砂は？」と言って土山に登る。

A児「ちょっと固いよ。これじゃあだめだよ」

教師「サラサラの砂って石が入ってなくて、風が吹いたら飛んでいっちゃう、水が全然入ってない乾いた砂のことだよ」

A児「そうだ。この前、風で砂が飛んで目に入っちゃったことあった。あっちだよ」と

R児と教師を連れて行き、「ここ、ここ」と非常階段の下にたまっている砂を指さす。

R児「これならいいかも。すごくサラサラの砂だよ」と早速かけてみる。

A児「何回もかけないといけないうんだよね」と黙々と砂をかけていく。

R児「先生、すごく固くなってきたよ。私50回かけたんだ。触ってみて」

教師「本当だ。カチカチになっている。すごいね！」

A児「私もいっぱいかけたよ」

教師「本当だ。すごいカチカチだね。二人とも頑張ってサラサラの砂があるところ探したもんね。いいサラサラの砂が見付かってよかったね」

R児「うん。このサラサラの砂は、魔法の粉だね！」A児「そうだね！」と何度も砂をかける姿が見られる。



<考察>

教師は泥だんご作りに興味を持ったR児とA児がいろいろな遊び方や、泥だんごを通して、更に自分で考えたり、不思議さ、おもしろさに気付いたりして欲しいと思い、その方法の一つとして のように絵本を用意しておいた。絵本を見たことで、固く崩れないようにするにはどうしたらよいかという自分たちの疑問を解くかぎを見付け、 のように、そのことを実際に試してみようとする姿が見られた。教師が声を掛けるだけでなく、本などの文献を使うことも幼児たちの探究心を更に深めていくには有効だと感じた。

サラサラの砂がどんな砂なのかを のように教師が具体的に別の言葉に置き換えて話したことで、A児、R児が、自分なりに考える中で、実際に自分が体験したことを思い出したり、納得する方法を見付けたりするきっかけになったのではないかと思った。

みどころ

この事例は「砂でおだんごができる」と思い作り始めるが、思うようにできない困難を感じながらも、様々な発見や学びをしている場面です。「どうしてだんごにならないの?」「同じ砂で作っているのに、手について丸まらなかったり、固まらずにすぐ落ちちゃたりする?」「この砂がサラサラだと思ったのに?サラサラ砂ってどんな砂?」と、今までの経験や知識で予想できる「知っている」「思っている」ことが思うようにならず、どうしてだろうと「不思議さ」を感じながらも遊びが進んでいます。

同じ思いで同じように不思議さや困難を感じて、感じたことや思ったことを言葉にしながら、一緒に遊びを進める友達存在の大切さが分かります。

また、保育者が子どもと一緒に遊びながら、気付いたことや手がかりになることを示していることで、4歳児なりに不思議や疑問を考えたり困難を乗り越えたりして、主体的に遊びを進め楽しんでいます。